

明・崇禎帝の諡号について（１）

The Posthumous Titles of Ming Emperor Chongzhen (1)

滝野 邦雄
Takino, Kunio

ABSTRACT

By explaining the change to the posthumous title of the last Ming emperor, Emperor Chongzhen, and its significance, this paper examines how the evaluation of Emperor Chongzhen changed. The finding is that no matter how many times the posthumous titles given by the Southern Ming government were changed, in all cases no posthumous title was given that expressed a high evaluation. The paper clarifies that, in contrast, the Qing government gave the emperor of a fallen state, Emperor Chongzhen, a high evaluation.

はじめに

朱彝尊（字は錫鬯，号は竹垞，又の号は醴舫。浙江秀水の人。崇禎二年〔一六二九〕～康熙四十八年〔一七〇九〕。康熙十八年己未〔一六七九〕博學鴻儒科第一等十七名の進士）は次のように伝える。

〔崇禎帝の〕「莊烈愍皇帝」の諡の若きは，本朝より定まる。而るに野紀紛紜として或いは「思宗烈皇帝」と書し，或いは「毅宗烈皇帝」と書し，或いは「威宗烈皇帝」と書し，或いは「懷宗端皇帝」と書す。宜しく以後之が諡を定め大書簡端すべき者なり（『曝書亭集』卷三十二・十一葉「史館上總裁第七書」）。

清朝は，崇禎帝の諡号を「莊烈愍皇帝」と定めたが，民間ではその諡号は混乱しているという。

それは，崇禎帝の諡号・廟号が五回にわたって変更されたことによる。鄧

之誠（字は文如，号は明齋，又の号は五石齋。江蘇金陵の人。一八八七年～一九六〇年）は具体的に崇禎帝の諡号・廟号の変遷を次のように述べる。

『明詩綜』一上に「思陵 葬るの日，皇朝 未だ江南を収めず。福藩 稱制し，遙かに帝の諡を^{たてまつ}上りて「紹天繹道剛明恪儉揆文奮武敦仁懋孝烈皇帝」，廟號を「思宗」と曰う。[……] 尋いで帝の廟號を^い「毅宗」に改む。唐藩 稱制し，復た「威宗」に改む。皇朝の順治の初め，更に帝に諡して「欽天守道敏毅敦儉弘文襄武體仁致孝懷宗端皇帝」と曰い，后を「孝敬貞烈慈惠莊敏承天配聖端皇后」と曰う。既にして「莊烈愍皇帝」に改稱す。凡そ五たび易わり，而して後定まる。今，神牌の書する所は，即ち順治に初定の一十六字なり。第だ其の下は改めて「莊烈愍皇帝」と書すと，^{しかい}云う（『明詩綜』卷一・「莊烈愍皇帝」条），と。李清の『三垣筆記』中に「弘光の初め，帝補の^{たてまつ}〔高〕弘圖の請に従いて，帝の廟號を上りて「思宗」と曰う。予 上疏して改めんことを請う。後に管少宗伯紹寧（管紹寧：字は幼承，号は泰階。江蘇武進の人。崇禎元年戊辰科〔一六二八〕一甲三名（探花）の進士）「敬宗」と「毅宗」とを以て並びに請い，詔もて「毅」を用う。偶たま一閩紳の集を讀むに，「毅宗」を稱して「威宗」と爲すを見る。禮科の羅都諫志儒（羅志儒：字は無他，号は印尼。山東濮州の人。崇禎元年戊辰科〔一六二八〕三甲二百八十一名の進士）復た陵名を以て請うに，之を予に商す。予 曰く，當に故の廟號を以て陵に名づけて「思陵」と曰うべし，と。志儒 之を是とす（『三垣筆記』筆記中・崇禎），と。屈大均の『翁山文外』十三の「大行愍號攷」に「其の後，弘光の廟號は永曆の間に諡して「思宗安皇帝」と曰う。而して烈皇帝を以て「威宗」と爲し，隆武は則ち「紹宗襄皇帝」と曰い，皇考桂王を「端皇帝」と曰う」（卷十三・雜文 引・「大行愍號攷」条），と（『骨董鎖記』卷二・一九九一年中国書店刊・四十二葉・「崇禎帝諡號五易」条）。

つまり，

南明・弘光朝

諡：紹天繹道剛明恪儉揆文奮武敦仁懋孝烈皇帝 廟號：思宗

諡： " 廟號：毅宗

南明・永曆朝

諡： " 廟號：威宗

清・順治朝

欽天守道敏毅敦儉弘文襄武體仁致孝懷宗端皇帝 廟號：懷宗

欽天守道敏毅敦儉弘文襄武體仁致孝莊烈愍皇帝 廟號：無し

というように代わっていったという。

なお、諡号について、秦・始皇帝の次のような逸話が伝えられている。

制して曰く、朕 太古には號有りて諡母く、中古には號有り、死して行を以て諡と爲す、と聞く。此の如ければ則ち子 父を議し、臣 君を議するなり。甚だしく謂う無し。朕 焉を取らず。今より已來、諡法を除かん。朕 始皇帝と爲り、後世 數^{かぞ}を計うるを以て、二世・三世より萬世に至り、之を傳えて窮まること無し、と（『史記』秦始皇本紀）。

始皇帝は、後の人たちによって自分が評価され諡号が決められることに不満であり、「始皇帝」の称号の原因となったというのである。

「諡は行いの迹なり」といわれるように、諡号はその人物の評価にかかわるものである。すると、崇禎帝の諡号・廟号がたびたび変更されてきたというのは、そのたびごとに崇禎帝の評価に変化があったことを意味する。そこで、拙稿においては、崇禎帝の諡号・廟号の変遷を検討することで、崇禎帝の評価がどのように変わっていったのかを明らかにしてみたい。そのため、はじめに南

（1）『禮記』表記に「子 曰く、先王 諡して以て名を尊び、節するに壹惠^{いちけい}を以てす。名の行いに浮ぐるを恥づるなり……」とあり、その鄭注に、

諡は行いの迹なり。名は聲譽を謂うなり。言うところは先王の行いを論じて以て諡と爲す。以て名を尊ぶは、聲譽をして得て尊信す可からしむるなり。壹は讀んで一と爲す。惠は猶お善のごときなり。言うところは聲譽 衆多有る者と雖も、節するに其の行いの一大善なる者を以て諡と爲すのみ……。

とある。

明政権での諡号・廟号の変遷を、次いで清朝での変遷を述べ、続いてそれぞれの諡号・廟号もつ意味を検討してみるつもりである。

(1)

計六奇の『明季南略』（康熙十年（一六七一）に脱稿）によれば、南明政権において、崇禎帝の諡号は次のようにして決まっていたという。

〔崇禎十七年（一六四四）〕六月初六壬戌、大行皇帝に諡して「思宗烈皇帝」と曰い、皇后を「孝節皇后」と曰う。『大事記』に云う、六月廿三日、先帝の^{ママ}后（諡）號を「思宗」に御定す。是れより先、閣臣の高宏（弘）圖奉けたる旨もて撰擬し、已經に^す點用（採用）さる。典則を考據し、備極徽隆（広範囲にわたる）なるに及べば、必ずしも再び改めず。部に下すこと久しければ、著して^{ただち}即^しに詔を頒きて行せよ。七月初七日に至り、各官をして追尊する諡號を頒行せしめ、天下に詔す、と。『甲乙史』に云う、六月廿一、忻城伯の趙之龍 先帝は當に廟號を「思」と曰うべからず、「思」字は美に非ずと奏辯す。蓋し〔趙〕之龍は實に一丁も識らず、李沾^{そその}の^{そその}嗾かし高弘圖を排せしむるなり。後、「毅宗」に改たむ。左良玉 云う、「思宗」の諡を改むるは、先帝 思うに足らざるを明示す。馬士英の第一の罪と爲す、と。清朝 諡して「懷宗」と爲す。而るに永曆朝 又た諡して「威宗」と爲す（北京琉璃廠半松居士木活字刊本『明季南略』卷之二・一葉・「先帝諡號」条）。

崇禎十七年（一六四四）六月六日に「思宗烈皇帝」と諡したが、六月二十一日に趙之龍が廟號の「思宗」は好ましくないとする。しかし、六月二十三日に「思宗」と定まる。その後、「毅宗」に改められ、永曆朝では「威宗」とする。また、清政権は「懷宗」としたというのである。

そこで、以下で具体的にどのような議論がなされたのかを検討してみたい。

南明政権は、自己の正統性を主張するために、崇禎帝の喪を発する。その

日付は、顧炎武（字は寧人，初名は絳，後に炎武に改める。亭林先生と称される。江蘇崑山の人。明・萬曆四十一年〔一六一三〕～清・康熙二十一年〔一六八二〕）の『聖安本紀』によると，崇禎十七年（一六四四）五月六日のこととする。

〔崇禎十七年五月〕癸巳（六日），大行皇帝の爲に舉哀（哀悼）して哭臨（位牌の前で泣き叫ぶ）す。

李清（字は心水，号は映碧，晩年は天一居士と号す。揚州興化の人。明・萬曆三十年〔一六〇二〕～清・康熙二十二年〔一六八三〕。崇禎四年辛未科〔一六三一〕三甲一百八十六名の進士）の『南渡録』⁽²⁾では，五月三日に喪を発したといい「哀論」を載せる。

〔崇禎十七年五月庚寅（初三日）〕大行皇帝の喪を発し，天下に諭す（『南渡録』卷之一・崇禎十七年甲申・「五月庚寅（初三日）」条・三葉・浙江古籍出版社一九八八年刊）。

また、『國榷』も「發喪」という記述はないが，「哀論」を五月四日に発したといい，そこに次のようにあることから，五月四日に崇禎帝の喪が発せられたとしているようである。

〔崇禎十七年五月〕辛卯（初四日），監國の哀論に曰く，……〔崇禎帝の〕喪禮は舊制に依り，日を以て月に易え，二十七日もて釋服（忌明け）し，民間の音樂・嫁娶を禁ずること母れ。督・撫・鎮守・都・布・按・三司の官員，地方の繋ぐ攸^{ところ}なれば，擅^たまに職守（職務）を離れるを許さず。聞喪の日より，止^ただ本處（その地）に于いて哭臨すること三日にし，進香は官を遣りて代行せよ。衛所・府・州・縣の士官 並びに進香を免ず。天下に諭告し，咸な聞知せしめよ（『國榷』卷一百一・六〇八四頁・思宗崇禎十七年・「五月辛卯（初四日）」条）。

（2）謝國楨の『增訂晚明史籍考』（卷十 南明三朝上・「南渡録五卷」条・上海古籍出版社・一九八一年刊）は，「按ずるに『南渡録』は弘光一代の時事を記して最も詳允（公正で適切）と爲す」と『南渡録』を評している。

なお、錢海岳（字は騰英。江蘇無錫の人。一九〇一年～一九六八年）の『南明史』は、五月六日のこととする。

〔崇禎十七年（一六四四）五月〕癸巳（初六日）、大行皇帝の爲に舉哀して哭臨す（二〇〇六年中華書局刊『南明史』卷一・本紀第一・安宗・第二冊・四頁）。

さて、喪が発せられてすぐの五月十三日に顧錫疇（字は九疇、号は瑞屏。江蘇崑山の人。萬曆四十七年己未科〔一六一九〕三甲一百二十六名の進士）が、崇禎帝とその皇后の諡号の制定を求める。速やかに崇禎帝の諡号を制定して、喪に服する期間が終われば、宗廟に収めるべきだという。監國（福王（弘光帝）五月壬寅（十五日）に即位）はその提案に従う。

南京禮部右侍郎の顧錫疇 先帝・先后の尊號を請うて曰く、本朝の代興の際の典禮 具に存す。之を今日に揆れば、微かに合わざる有り。臣等 痛念するに大行皇帝は剛明（嚴明）勤儉にして、備わるに令徳有り。一旦の悲 毫社^①に纏わり、慟は麥秀^②より深し。〔在位が〕十七年の敬天畏民憂深慮遠の聖主、含憤（憤り）りて戡恨（遺憾に思う）す。臣等 何れの心ありて、尙お顔面を存せん。今、天地・社稷の靈に頼みて、國に君有り。殿下 又た厲志（奮い立ち）て圖報（うらみにむくいる）せんとす。此れ貞臣志士の戟を荷^{ほこ}いて劍を叱^{にな}らざるは無きなり。大寶（帝位）將に新たにならんとして、大行帝后 乘龍（亡くなる）し、鑄鼎（没後）の氣、震蕩流越（流散）すれば、即ち馨 牢（おそなえ）に玉を薦め、痛み有りて聲無く、哀しみ有りて泪無きを覺ゆ。〔そうすれば〕十六朝の天子 寧ぞ^{いずくん}見ゆるに堪えん。宜しく亟^{すみ}やかに九卿科道に命じて會議し、早に尊號を上り、釋服（忌明け）を俟^まちて、主を奉じて廟に入れ、以て先靈^{やすん}を妥すべし。若し坐して歲月を需^まちて、舊章に拘守すれば、恐らくは怨恫（哀痛）に甚だし。南望して歸る無く（『莊子』外篇・天地篇）、冤慘の極み、蒼穹（天）に訴える無し。臣等 迫切に哀籲（哀求）し以て聞す、と。監國（福王（弘光帝）五月壬寅（十五日）に即位）之に従う（『國榷』卷

一百一・六〇九七頁・思宗崇禎十七年・「五月庚子（十三日）」条）。

①『漢書』五行志上に「[哀公]四年，「六月辛丑，亳社災」。董仲舒・劉向以爲亡國之社，所以爲戒也」条に顔師固は「亳社，殷社也」とあり，また「存其社者，欲使君常思敬慎，懼危亡也」と注する。

②微子が亡んだ殷の都を通り過ぎた時に作った詩の題名。

『南渡錄』も同じく五月十三日に諡号の制定を命じたという。

[五月庚子（十三日）] 大行皇帝・皇后の尊號を上つるを命ず（『南渡錄』卷之一・十一葉・崇禎十七年甲申・「五月庚子（十三日）」条・十一葉・浙江古籍出版社一九八八年刊）。

そして、二十七日の服喪の期間が過ぎた，六月六日に，諡号を奉るようお願い出た顧錫疇が崇禎帝の諡号を「紹天繹道剛明恪恭揆文奮武敦仁懋孝乾宗烈皇帝」に，皇后の諡号を「孝節貞肅淵恭莊毅奉天靖聖烈皇后」と擬撰して提出する。すると，高弘圖が「烈」字は問題ないが，「乾宗」とするのはよくないとし，廟号を「思宗」に改めるように要請する。こうして，高弘圖の提案のように，廟号を「思宗」と変更し，諡号はそのままの「紹天繹道剛明恪恭揆文奮武敦仁懋孝思宗烈皇帝」として決定する。

壬戌（初六日），南京禮部尙書の顧錫疇 擬して大行の尊諡を「紹天繹道剛明恪恭揆文奮武敦仁懋孝乾宗烈皇帝」・「孝節貞肅淵恭莊毅奉天靖聖烈皇后」と上つる。蓋し列聖 繼美（前人の美德を継ぐ）なれば，諡號は幾ど偏し。廣く經史を參し，理として拘牽さるる無し。今，「烈」の一字は

（3）徐鼎の『小腆紀年附考』（咸豐十一年〔一八六一〕成る）によると，崇禎帝の諡號は，「紹天繹道剛明恪恭揆文奮武敦仁懋孝烈皇帝」とあり，「恭」字が「儉」字になっている。

壬戌（初六日），明 崇禎帝・后の諡號を上つる。

帝の諡は，「紹天繹道剛明恪恭揆文奮武敦仁懋孝烈皇帝」と曰い，廟は「思宗」と號す。后の諡は，「孝節貞肅淵恭莊毅奉天靖聖烈皇后」と曰う。大學士の高弘圖の擬する所なり。論して曰く，典則を考據し，備極徽隆たり，必ずしも再び改めず。即ち頒詔行せよ，と。

徐鼎 曰く，既に「必ずしも再び改めず」と曰い，後に復た之を改むるは何ぞや。甚だしきかな王の小人に回惑さるや，と（『小腆紀年附考』卷第六・清世祖順治元年六月壬戌（初六日）条）。

「詢謀すること僉^みな同じ」（『書經』大禹謨：議論した意見が一致する）。未だ敢て即ち安からざる所の者は惟だ廟號なり。閣臣の高弘圖は恭しく擬して「思」と曰う。臣部は則ち恭しく擬して「乾」と曰う。⁽⁴⁾先帝は十七年〔の間〕憂勤（国のことを憂慮してよく働く）なれば、潜より亢にいたる（易の乾の卦：下から上まで）まで其の正を失わざるの義を得んことを庶〔ついていたからである〕。今、併せて擬して進呈し、聖明の裁定を祈る。旨を得て大行皇帝の廟號は「思宗」とし、餘は議の如くす（『國權』卷一百二・六一一―二頁・思宗崇禎十七年・「六月壬戌（初六日）」条）。

なお、『南渡錄』によると、この六日には、宗廟の建築を命じている。

〔六月壬戌（初六日）〕工部に議して宗廟を建つるを命ず（『南渡錄』卷之一・二十七葉・崇禎十七年甲申・「六月壬戌（初六日）」条・浙江古籍出版社一九八八年刊）。

ちなみに、顧錫疇のこの擬撰は門人の謝復元が行なったものと顧炎武は伝える。

臣（顧炎武）聞く當日 南京 新たに立ち、邦禮 繁多なり。禮部尚書の顧錫疇 素より古を考えず、一切の諡號は悉く其の門人の謝復元の撰定に聴く、と。不學の宗伯（禮部尚書）を以て、巷の小夫に任委す。其の胸臆を逞しくし、目に旁人無く、以て諡冊の一たび頒たるるに至り、天下用て譏を爲す。今、聖明 御極（即位）するの日に當りて、亟やかに更定を爲さざる可けんや。『[禮] 記』に曰く「天子に非ざれば、禮を議せず」（『中庸』第二十八章・第二節）と、『孟子』に曰く「禮の實は、斯の二者（仁之實・義之實）を節文（節度があつて立派にする）す」（離婁上）と、是れなり。一代の尊親の制を定め、以て宗廟に告げ、以て子孫に垂る。事如し待つこと有れば、臣（顧炎武） 倦倦に勝えず。謹みて議す（『亭林餘集』・「廟號議」）。

（4）「乾宗」という廟號は、用例がない。しかし、陵墓の名としては、唐太宗の「乾陵」と遼の景宗の「乾陵」とがある。

さて、六月十五日になると趙之龍が反対意見を提出する。「烈」字には問題がないものの、「思」字は美惡の意味を兼ねた諡であるというのである。また、顧錫疇もこの日に意見書を提出し、改めて以前自分が擬撰した「乾宗」の廟號にするようにという。

[辛未（十五日）] 總督京營戎政少保兼太子太保の忻城伯の趙之龍 言えらく、閣臣の高弘圖 先帝の尊諡を擬して「烈」と曰い、廟號を「思」と曰う。臣 諡法を按ずるに「剛正」を「烈」と曰い、「功有りて民を安んず」・「徳を^と乗りて業を尊ぶ」を「烈」と曰う。此れ無庸易（^{かえ}易るを庸い^{もち}る無し）。[しかし] 獨り「思」字 未だ安からざる有り。諡法を攷うるに、「道德純一」なるを「思」と曰い、「大いに兆民を省みる」・「外内思索する」を「思」と曰う。「謀慮^{あやま} 愆^{あやま}たず」・「終わりを念いて始めの如き」を「思」と曰う。又た「前過を追悔（後悔）する」を「思」と曰う。[すると] 則ち「思」は固より美惡 相い兼ねるの諡なり。四千載を歴覽するに「思」を以て天子に諡する無し。獨り宋の高宗のみ「思陵」と號す。漢の劉宇・劉荆・魏の曹植は皆な「思王」と諡す。漢の劉蒼・劉中時は皆な「思侯」と諡す。當時は未だ嘗て以て諡を下すを爲さざるにあらざるなり。國朝は弘治以來、代王聰沐（『明史』作「沫」）・均王載^②夙（『明史』作「夙」）（世宗（嘉靖帝）の子）は皆な追諡して「思」と曰う。嘉靖中、秦府東川王の秉格に「思裕」と諡す。弘治中、閣臣の彭華（字は彦實。江西安福人。景泰五年甲戌科〔一四五四〕二甲二十一名の進士）に「文思」と諡す。則ち亦た未だ嘗て以て美諡と爲さざるなり。今、察するに諡を上るに、文・武・成・宣・章・光・英・毅・純・仁・孝・獻・睿・哲・莊・敬・貞・肅・憲・神・穆・昭・顯・熹・景などの如きの外、「四方を照臨す」・「思慮果遠なる」・「獨見先識なる」を「明」と曰い、「純行^{たが} 爽^{たが}わらず」・「民を安んじて古を法とす」を「定」と曰い、「禮を守りて義を執る」を「端」と曰い、「己を恭して身を正す」を「靖」と曰い、「朝夕 溫恭なる」を「恪」と曰い、「事を制して宜しきに合う」・「義を見て終を能く

す」を「義」と曰うが如し。今、若し廟號を「烈」と爲せば、則ち前の數字は皆な諡す可きに似たるなり。此の外、「義を執りて善を揚ぐ」を「徳」と曰い、「通明」を「聖」と曰い、禮に厚きを「聖」と曰い、「衆善 播揚する」を「聖」と曰う。誠に大行（故皇帝）の大名を受くるの義なり。乞う閣部に下して詳酌し、再び諸臣をして集義せしめ、聖裁を取定せんことを。禮部尚書の顧錫疇 是の日に疏すること亦た之の如し。〔顧〕錫疇は前〔の六月六日〕に廟號を「乾宗」に擬す（『國權』卷一百二・六一一九頁・思宗崇禎十七年・「六月辛未（十五日）」条）。

①代王聰は、沐廢せられて庶人となる。

②均王載風一歳未満で没。

なお、『南渡錄』によると、これを己卯（二十三日）のこととしている。ここでは、顧錫疇は以前に擬撰した「乾宗」を「正宗」に改めて提案したという。

己卯（二十三日）、禮部 更めて「思宗」の廟號を議し以て請う。詔もて舊に仍る。

時に忻城伯の趙之龍 疏もて「思」は美稱に非ずと言ひ、援證 甚だ核われり。禮臣の顧錫疇 改めて「正宗」に擬し以て請う。閣臣の高弘圖 前の擬〔した「思宗」〕に固執し、重ねて其の意に違ふ。命じて之に仍る（『南渡錄』卷之一・五十葉・崇禎十七年甲申・「六月壬戌（初六日）」条・浙江古籍出版社一九八八年刊）。

徐鼎の『小腆紀年附考』（咸豐十一年〔一八六一〕成る）も、『南渡錄』と同じく趙之龍の反対意見提出日を六月二十三日に掛けている。そして、趙之龍はもともと学問がなく、この反対意見は、李沾がそそのかしたものだという。

己卯（二十三日）、明の趙之龍 「思宗」の廟號を改めんことを請う。許さず。

〔趙〕之龍 高弘圖の廟號を議するの失を糾^{ただ}し、「思」は下の諡と爲すと謂う。〔趙〕之龍 字を識らず、李沾の之^{そその}を嗾かすなり。〔高〕弘圖

疏もて辨じ、詔もて舊に仍る（『小腆紀年附考』巻第六・清世祖順治元年六月己卯（二十三日）条）。

また、計六奇の『明季南略』（康熙十年（一六七一）に脱稿）に引く『甲乙史』では、

『甲乙史』に云う、六月廿一日、忻城伯の趙之龍 先帝は當に廟號を「思」と曰うべからず、「思」字は美字に非ずと奏辯す……（『明季南略』巻之二・一葉・「先帝諡號」条）。

とあり、六月二十一日のこととする。

このような経緯をへて、崇禎十七年六月戊寅（二十二日）に廟号は「思宗」に決まる。

戊寅（二十二日）、先帝の廟號を「思宗」に定む。大學士の高弘圖 言えらく、天子の天と稱し以て誅するは、臣子の私する所に非ざるを明らかにすればなり。堯・舜・禹・湯は世々 美諡と稱され、天地を同じくし毀たれず。文王の文は「經天緯地」なり（諡法解に「經天緯地曰文」）、武王の武は「禍に戡ち亂を定むる」なり（諡法解に「克定禍亂曰武」）。自昔（以前）より遺徽（前人の德行）は、義に單複有り。若し必ず衆流（各学派）を博渉し、意 美備を該ぬれば、則ち季孫行父も西伯に匹す可し、甯俞（論語・公冶長）も遂に世室に擬せらる。諡は人を以て重んず。諡もて能く人を重んずるに非ず。「容儀 恭美なる」（諡法解に「容儀恭美曰昭」）魯昭公は『春秋』に刺らる（『左氏傳』襄公三十一年傳に「君子是以知其（昭公）不能終也」）。而れども本朝 之を以て仁廟（^①洪熙帝 / 仁宗）を尊ぶは、「容儀恭美なる」の謂に非ざるなり。且つ「夸志 多く窮まる」（諡法解に「夸志多窮曰武」）も、「武」も亦た累有り。「民を愍み禮を恵む」（諡法解に「愍民惠禮曰文」）なるも、「文」は絶德に非ず。而るに周家「文」・「武」を推美（贊美）す。歴代の帝王 多く之に因りて美號を作る。本朝の文武の諸臣の諡は、例として閣臣の兩議に由り、各々釋義を具え、旨を請いて點定（最終的に決定）し、乘輿に關及するに至る。惟だ

上裁（皇帝の裁決）を定議するに、事體 各々異なれり。『書 [經]』に曰く、「天 下民を降して、之が君と作し、之が師と作す」（『孟子』梁惠王上に引く『書』。『書經』泰誓上は「天佑下民，作之君，作之師」）。先帝

民隱（民衆の痛苦）を勤卹（憂い）し、貪を懲らし廉を録し、屢しば詔もて蠲逋（焦げついた租税を免除する）し、六子を表章す。一たび胡の寇するを聞かや、惻愴し寧きこと靡し。升遐（崩御）の日も猶お百姓に念及す。君師の義（『荀子』禮論「禮有三本。……君師者，治之本也」）は、先帝 克盡し憾み無し。臣 故に諡法の「大省兆民曰思」に就きて、其の鉅重を擧ぐ。若し今昔の諸臣の斯の諡を同じくする有るも、意は或いは別議あり、豈に兆民に在らんや。彭文憲（彭時。江西安福の人。正統十三年一甲一名の進士）の憲、詎ぞ憲廟（成化帝 / 憲宗）に同じからんや。王文成（王守仁）の成は、成祖を例とし難し。必ず類を引き苛指し、舊文に拘牽（拘泥）すれば、則ち往代を論ずること亡く、即ち本朝の二祖・列宗は俱に得て再び議す可きなり。何ぞ先帝のみ爲さんや、と。疏 上られ、仍りて「思宗」と稱す。勳臣 冢宰（吏部尚書：高弘圖）を逐うの後より、尊號の薦舉の條列の不一なるを許かる（『國權』巻一百二・六一二三頁・思宗崇禎十七年・「六月戊寅（二十二日）」条⁽⁵⁾）。

①洪熙帝 / 仁宗の諡号・廟号は「仁宗敬天體道純誠至德弘文欽武章聖達孝昭皇帝」であり、「昭皇帝」となる。

崇禎帝は、民の苦しみを憂え、綱紀を肅清し、しばしば免税を行い、儒者を振興した。胡が侵略してきたことを聞くと、憂いて落ち着かなかった。亡くなる日も民のことを思っていた。このように、治世については、本分を尽くしたのであるから、諡法の「大いに兆民を省みるを「思」と曰う」によって、「思宗」に決定した、と高弘圖はいう。しかし、冢宰（吏部尚書：高弘圖）が十月初旬

(5) 計六奇の『明季南略』（康熙十年（一六七一）に脱稿）に引く『大事記』に、

『大事記』に云う、「六月廿三日、先帝の廟號を「思宗」に御定す（『明季南略』巻之二・一葉・「先帝諡號」条）。

とあり、六月二十三日のこととする。

に罷めてからは（高弘圖は、『國榷』によれば十月五日に、『小腆紀年附考』によれば十月六日に罷める）、諡号の不備が指摘されるようになったというのである。

そして、計六奇の『明季南略』（康熙十年（一六七一）に脱稿）所引の『大事記』によると、七月初七日に崇禎帝の諡号を公布したという。

六月初六壬戌、大行皇帝に諡して「思宗烈皇帝」と曰い、皇后を「孝節皇后」と曰う。『大事記』に云う、「……七月初七日に至り、各官をして、追尊する諡號を頒行せしめ、天下に詔す」と（『明季南略』卷之二・一葉・「先帝諡號」条）。

七月初七日に公布したことと、『國榷』に引用する顧錫疇の、

……宜しく亟^{すみ}やかに九卿科道に命じて會議し、早に尊號を上り、釋服（除去喪服。謂除喪）を俟ちて、奉主し廟に入れ、以て先靈^{やす}を妥んずべし……（『國榷』卷一百一・六〇九七頁・思宗崇禎十七年・「五月庚子（十三日）」条）。

という発言とから考えると、この七月七日に崇禎帝の喪が明けたのであろうか。ただ、喪を発した五月の上旬から、すでに弘光帝の服喪の期間である二十八日は、かなり過ぎている。

さて、翌年の二月一日になると、李清（字は心水、号は映碧、晩年は天一居士と号す。興化の人。明・萬曆三十年〔一六〇二〕～清・康熙二十二年〔一六八三〕。崇禎四年辛未科〔一六三一〕三甲一百八十六名の進士）が、廟号の変更を願いでて、それが認められる。

弘光元年（一六四五）二月甲寅（一日）南京工科都給事中の李清 先の皇帝の『實錄』並びに「思宗」の廟號を易えんこと、及び東宮の二王に諡せんことを請う。之に従う（『國榷』卷一百四・六一八〇頁・弘光元年・「二月甲寅（一日）」条）。

そして、二月二十三日に「思宗」の廟號を改めて「毅宗」とする。ただ、これが武宗（正徳帝）の諡号にある「武宗承天達道英肅睿哲昭徳顯功弘文思孝毅

皇帝」の最後の「毅」字を犯しているのではないかと議論があったようである。

甲戌（二十一日）、先帝の廟號を「毅宗」に改む。本朝の諡號は相い犯さず。今、武宗（正徳帝）の諡を犯すとするは、非なり（『國權』卷一百四・六一八七頁・弘光元年・「二月甲戌（二十一日）」条）。

『南渡錄』も、弘光元年（一六四五）二月丙子（二十二日）「毅宗烈皇帝」に変更したといい、おそらくは武宗（正徳帝）の諡号と新しく改めた崇禎帝の「毅宗」廟號とが重なることについての管紹寧の疏を載せる。

〔弘光元年（一六四五）二月丙子（二十二日）〕更めて思宗烈皇帝と上り、廟號を「毅宗」と曰う。

署禮部の管紹寧 疏言するに、諡法と廟號とは、互いに見るを妨げず。我朝の如きは「睿皇帝（英宗）」有りて、又た「睿宗（世宗（嘉靖帝）の父）」有り。「仁祖（太祖の父）」有りて、又た「仁宗（洪熙帝）」有り。況やト世（国の命数）窮まり無く、嘉名 限り有り、と。詔もて「毅」を用う（『南渡錄』卷之四・崇禎十七年甲申・「五月庚寅（初三日）」条・二二一頁・浙江古籍出版社一九八八年刊）。

管紹寧によると、明朝においてはこれまでも諡号と廟號とが重なっているものがあり、それは問題がないという。

『三垣筆記』にも同様のことを述べられ、やはり管紹寧の疏が引用される。そうして、この時に「敬宗」と「毅宗」とが擬撰され、「毅宗」に決まったという。

弘光の初め、先ず高弘圖萬曆庚戌〔の進士〕、膠州の人の請に従いて、上帝の廟號を「思宗」と曰う。予 上疏して改めんことを請い、屢しば擬するも皆な駁せらる。最も後に管少宗伯紹寧崇禎戊辰〔の進士〕、武進の人疏言して曰く、諡法・廟號は互いに見るを妨げず。我朝の如きは「睿皇帝（英宗）」有りて、又た「睿宗（世宗（嘉靖帝）の父）」有り。「仁祖（太祖の父）」有りて、又た「仁宗（洪熙帝）」有り。ト世（国運の命数）窮まり無く、

嘉名 限り有り、と。乃ち「敬宗」と「毅宗」とを以て並び請う。詔もて「毅」を用う（『三垣筆記』筆記中・崇禎）。

また、『小腆紀年附考』も二年二月二十三日に「思宗」の廟號を改めて「毅宗」としたといい、余煜（字は武貞。浙江會稽の人。天啓五年乙丑科〔一六二五〕一甲一名の進士（狀元））の意見を載せる。

〔順治二年二月〕丙子（二十三日）、明「思宗」の廟號を改め「毅宗」と曰う〔考に曰く、『南都甲乙紀』は以て甲戌（二十一日）の事と爲す〕。

是れより先、趙之龍 奏すらく、「思」は美諡に非ず。改めんことを請う、と。許されず。高弘圖・顧錫疇^① 已に位を去り、禮部の余煜 上言して曰う、諡法を按ずるに、「道德純一なるを「思」と曰い」、「前過を追悔するを「思」と曰う」。先王 憂勤すること十七年、念念として堯・舜と爲らんと欲する者なり。〔しかし〕「家の造らざるに遭い」（『詩經』周頌・閔予小子）、亂階（禍い）頻りに起こる。而して用いる所の人 又た皆な君を欺くに忍く、率いて國を誤るに致す。先帝に於いて何の咎あらん。「道德純一」たるは則ち貶むるに似たり。「前過を追悔する」は則ち譏るに似たり。揚ぐるを覲るに於いて無當の無きなり。且つ唐・宋以來、未だ「思」と諡する者有らず。周の思王^②・漢の後主^③は闇弱なり、何ぞ述ぶるに足らん。諡法に「功有りて民を安んずるを「烈」と曰う」と。今、國破れ家亡び、身を以て國に殉ず、何の「烈」なること之れ有らん。若し激烈の「烈」なれば、又た諡法の謂に非ざるなり。周の烈王・威烈王（晉の分割を認め、戦国時代となる）・漢の昭烈（三国蜀の劉備）・魏^{ママ}の烈宗・唐の光烈帝（景宗：朱全忠に殺害される）は未だ嘗て殉難せざるなり。他日 之を史冊に書するに、將た諡法を按ずるや、諡法を按ぜざるや。故に「思」・「烈」二字は誤りを舉ぐと曰うなり。然らば則ち諡は宜しく何と云うべけんや。先帝の英明神武なるは、人の共^{うやま}に欽う所なり。而して内に聲色・狗馬の好み無く、外に神仙土木の營無し。難に臨みて慷慨し、國君 社稷に死するの義に合す。千古未だ有ら

ざるの聖主なり。宜しく尊ぶに千古未だ有らざるの徽稱（すばらしい諡）を以てすべし。古今を考訂し、已むを得ずして其の似たるを擬するに、當に諡して「毅宗正皇帝」と曰うべし」と。之に従う（『小腆紀年附考』卷第九・清世祖順治二年二月丙子（二十三日）条）。

①高弘圖は、『國權』によれば十月五日に、『小腆紀年附考』によれば十月六日に罷めている。また、顧錫疇は、『國權』によれば翌年の二月十四日に、『小腆紀年附考』によれば翌年の二月十一日に罷めている

②兄の哀王を殺して自立するが、すぐに弟の考王に殺される。

③『三國史』蜀書三・後主傳・裴松之注に引く『蜀記』に「諡して「思公」と曰う」。

諡法には、高弘圖のいう「大いに兆民を省みるを「思」と曰う^い」以外に、「道德純一なるを「思」と曰う」・「前過を追悔するを「思」と曰う」ともある。崇禎帝はすぐれた政治を行なおうとしたが、災難が続いて起こり、任命した下臣が崇禎帝を欺いて、国家を転覆させた。ここから「道德純一」であるとはいえない。また「前過を追悔する」とすれば崇禎帝を批判することになってしまう。また、国が滅び、身を以て殉じた崇禎帝を「烈」字で表現するのもふさわしくない。このことから、これまででない「毅宗正皇帝」という諡号とすべきであると、余煒はいうのである。

ちなみに、「千古未だ有らざるの徽稱」とされた「毅宗」であるが、西夏の第二代皇帝の李諒祚の廟号に用いられている（『宋史』卷四百八十五・外國一・夏國上）。

この後、李清の『三垣筆記』によると、隆武政権の時にまた「威宗」に改めたという。そして、李清は、歴史的に評判の悪い後漢の桓帝と北齊の高洋（文宣帝）との廟号が「威宗」であることを指摘する。更に、最初は「思宗」として劉禪（三国蜀・後主）と諡号を同じくし、後には歴史的に評判の悪い二人の皇帝と同じ「威宗」という廟号をつけたことを批判した。また、清朝が崇禎を「懷宗」とし、「宗」をつけたことをも非難する。前王朝の皇帝であるのに「宗」をつけたからである。

予（李清）偶たま一閩紳の集を読むに、「毅宗」を稱して「威宗」と爲すを見る。已にして乃ち隆武唐王の時に改むる所なるを知るなり。[そこで以下のように] 按ず。漢の桓帝の廟は「威宗」と號す。[後漢の桓帝は] 功德無きを以て罷く。北齊の主の高洋は先ず「文宣皇帝」と諡し、廟は「顯祖」と號す。其の臣の祖斑 夙に憾み有りて、文宣は狂暴なれば、何ぞ「文」と稱するを得んや、既に創業に非ざれば、何ぞ「祖」稱するを得んや、と言う。後、又た改めて「景烈」と諡し、廟は「威宗」と號す。斑 貶逐の後に乃ち舊に復す。未だ隆武の時の諸臣 何を以て此の「威宗」の] 號に改めるか審かならず。前は既に劉禪（三国蜀・後主：諡は思公）と諡を同じくし、後は又た漢の桓〔帝〕・高洋と廟號を同じくす。且つ〔高〕洋の棄てて用いざるの廟號と爲す。宜しく古人の宰相の須く讀書人を用うべきの歎有るべきなり。新朝（清朝）の廟號を遵議するの人の「懷帝」と稱せずして「懷宗」と稱するが若きは、尤も異なり。何れの家の「宗」なるかを知らざるなり。金の「哀宗」[というの] は乃ち其の末主の承麟（末帝）の諡する所なり。我が明は止だ元の庚申君に諡して「順帝」と曰うなり（『三垣筆記』筆記中・崇禎）。

以上、『國榷』によると、南明政権内での崇禎帝の諡号は、次のようにして決まったという。

崇禎十七年（一六四四）五月四日	崇禎帝の喪が発せられる
五月十三日	顧錫疇が崇禎帝に諡号を贈るように要請
六月六日	顧錫疇が「乾宗烈皇帝」と擬撰 高弘圖が「思宗烈皇帝」と擬撰 「思宗烈皇帝」とする
六月十五日	趙之龍が反対
六月二十二日	「思宗烈皇帝」に最終決定
弘光元年（一六四五）二月二十二日	「毅宗烈皇帝」に変更

隆武年間

「威宗」に変更（『三垣筆記』による）

『南渡録』によると、次のようになる。

崇禎十七年（一六四四）	五月三日	崇禎帝の喪が発せられる
	五月十三日	崇禎帝・皇后の諡号の作成を命ずる
	六月二日	顧錫疇が「乾宗烈皇帝」と擬撰 高弘圖が「思宗烈皇帝」と擬撰 「思宗烈皇帝」とする
	六月二十三日	趙之龍などが反対。しかし変更無し
弘光元年（一六四五）	二月二十二日	「毅宗烈皇帝」に変更
隆武年間		「威宗」に変更（『三垣筆記』による）

では、続いて清朝は崇禎帝の諡号・廟号をどのように取り決めたのか検討してみたい。

（つづく）